

序——平等主義的正義論の新たな展開に向けて——

福原 正人

本書評特集は、井上彰 (2017) 『正義・平等・責任——平等主義的正義論の新たな展開』岩波書店の刊行に因んで、去る2017年8月4日に相関社会科学研究会として開催された合評会の成果を取りまとめたものである。具体的に言えば、政治哲学・法哲学といったディスプリンは違えど平等論研究というテーマを同じくする若手研究者三名——森悠一郎、宮本雅也、阿部崇史——に寄稿を依頼し、さらに著者に応答を頂いた。なお、紙幅の都合で掲載できなかったが、合評会では上記三名の他に犬飼渉（本研究科博士課程）が評者として加わったことを記しておきたい。

本書の学術的意義は言うに及ばない。近年わが国において、とりわけ分析的政治哲学と呼ばれるディスプリンにおいて、平等論研究はいまや王道の研究テーマであり、英米学界では、多くの論者が自らの立場を擁護すべく議論を展開している。また、こうした研究への手引きとなり、同時に、水準の高い邦語研究も刊行されるようになった。こうした学術的状況において世に問われる本書が、わが国における平等論研究の標準的な参照点となることは間違いない。

分析的政治哲学の方法論的なコアは、擁護される結論にいたる論証が理に適った仕方理解・再現可能であるといった合理性に求められる。よって、論証の精確性や妥当性は、相互言及・批判による検証をもって試されると言っても過言ではない。本書評特集が、そうした役割を十全に果たし得ているか否かは読者の評価に委ねるとして、とりわけ一連の企画を快く引き受けてくれた著者である井上彰氏に感謝したい。優れた研究業績こそ、論争の中心にあることがこのディスプリンの宿命とはいえ、批判や論争が、時として人格を否定するもの、業績に傷を付けるものと誤解されることがあるわが国において、平等論を専門にする若手研究者による合評会や書評特集が成立したのは、氏の度量によるものが大きい。

最後に、本書評特集が、平等主義的正義論のみならず、分析的政治哲学一般への学術的貢献となることを強く願っている。